

「正信偈」について（第十八回）

正信偈の教え 下 古田和弘、正信偈のこころ限りなきいのちの詩 戸次公正、等による

ぜんどうどくみようぶつしようい

ひと

善導独明仏正意

善導独り、仏の正意を明かせり。

こうあいじようさんよぎやくあく

矜哀定散与逆悪

定散と逆悪とを矜哀して、

こうみようみようごうけんいんねん

光明名号顕因縁

光明名号、因縁を顕す。

かいにゆうほんがんだいちかい

開入本願大智海

本願の大智海に開入すれば、

ぎようじやしようじゆこんごうしん

行者正受金剛心

行者、正しく金剛心を受けしめ、

きようきいちねんそうおうご

慶喜一念相應後

慶喜の一念相應して後、

よいだいとうぎやくさんにん

与韋提等獲三忍

韋提と等しく三忍を獲、

そくしょうほつしようしじようらく

即証法性之常樂

すなわち法性の常樂を証せしむ、

といえり。

〔意訳〕

善導大師お独りだけが、仏の正しいお心を明らかにされた。

定善や散善を修める人、五逆や十悪を犯す人を哀れんで、阿弥陀仏の智慧の光明が往生の縁、名号が因となることを顕かにされた。

本願にそなわる広大な智慧に心を開かれ、本願に帰入するならば、念仏の行者は、まさしく金剛のような信心を受けとめ、信心を喜ぶ一念が大智と一致した後に、韋提希いだいけと同じように三忍の境地に入り、ただちに、真実が常であり、安樂であることをさとるのだ、と教えられた。

道綽禪師がおられた玄中寺を訪ねた善導大師は二九歳、道綽禪師は八十歳。善導は道綽から「仏説観無量寿經」の講説を聞き、本願他力の念仏の教えに目覚められた。善導大師の教えは自己の愚かさを厳しく自覚させ、それ故にこそ、阿弥陀仏から回向されている他力の「称名の念仏」によって浄土に往生することを深く喜ぶという、とても情熱的な教えであった。それまでは、厳しい修行によって、浄土のありさまを心に念じ続ける「観想の念仏」によらなければならないとされました。これに対し、善導は特定の人にしかできない修行を求めることは、釈尊のご本意ではないとして誰もが称えられる「称名の念仏」こそが往生の道であると説かれたのです。善導は、自分の努力によって心を静めて浄土を見つめようとする人(定善)も、散乱した心ながらも善を修めることによって浄土を求める人(散善)も、更に、五逆・十悪という罪惡を犯す人びとにも、等しく哀れみの心に向けられた。又、どのような場合、どのような人であろうと、阿弥陀仏の智慧の光明の輝きが、それらの人びとにとって、真実の信心に目覚める「縁」となり、阿弥陀仏の大慈大悲によって誰にも等しく差し向けられている名号が、真実の信心の「因」となると、教えておられるのです。

誤ってどのような方向に向かってしまった人であろうと、本願の智慧の輝きのなかに呼び戻されるのであるから、その人は、まさしく金剛のように硬い他力の信心を受け取らせてもらえるのであると、教えられます。

真実の信心に目覚めさせてもらった人の一念の喜びの心が、本願を^{おこ}発された阿弥陀仏のお心に合致(相応)するならば、その人は、韋提希夫人が得たのと同じ「三忍」を受け取ることになる、と教えられますのです。

「忍」は認める心、「三忍」は①喜忍・信心^{きにん}によって生ずる喜びの心、②悟忍・智慧の光明^{にん}によって目覚めさせられた心、③信忍・本願^{しんにん}をうたがうことなく信ずる心です。

そのことによって、ただちに、真実(法性)こそが常に変わることの無い、究極の安樂であることを会得することになる、と教えておられます。